

島尾敏雄と戦争

—自己矮小化を超えて—

柴田 哲谷

愛知学泉大学

Shimao Toshio and his wartime experiences

— behind his self-trivialization —

Tetsuya Shibata

キーワード：自己矮小化 self-trivialization、違和 a sense of incongruity、
妻の病 mentally ill wife、組織への適応 adaptation to the organization、
落ち着き・客観性 self-possession and objectivity

1. 自己矮小化とその実像

島尾敏雄には特攻隊長として南方の島に在った体験を踏まえた作品群がある。かつて筆者は、その中の『島の果て』『徳之島航海記』『出孤島記』『離島のあたり』の主人公に、「自己矮小化」を見出し、それが島尾の戦争への違和を下地としたものである旨を述べた。¹⁾

実務に有能な下士官や自分を隊長と仰ぐ兵たちへの引け目や遠慮、特攻を敢行した本物の特攻体験者に対する「うしろめたさ」、上記作品の主人公に見られるこうした心性は現実の島尾と必ずしも一致しない。矮小化は、戦争や軍隊組織への違和の表明であった。

このような違和の意識は、創作における島尾特有の視座である。彼は違和を意識化・対象化することによって、違和の目でもって周囲を鋭く見つめ返す視座を獲得し得たのではないか。それは、後の「弱さから逃げないぞ」²⁾ という自身の発言や「それは強さと言っても強靱さと言ってもよいものだと思う」³⁾ という吉本隆明の指摘が裏づけているように思える。⁴⁾

島尾の違和＝自己意識は、作品を深化させた

のであり、例えば奥野健男は、「ほかの誰もが書き得なかった極限状況下の人間の内面の深淵を、鋭く詳細に描いている」⁵⁾ と評価している。島尾に即して言えば、己れという個を徹底的に見つめ問いつめたことの結果として、極限状況下の人間一般に通底するような心理の深みの表出に到達したということにほかなるまい。⁶⁾

もとより作品はそれぞれに独立しているのだから、横断的に主人公の心性・意識の共通点や差異を考えることが意味を持つのかという問題はあるだろう。そもそも作品と作者は別物である。しかし、孤島の特攻隊長という立場に置かれた者の終戦前後のありようを描く以上、そこに作者自身の何らかの投影を見出さないわけにはいかないだろう。例えば、橋川文三は次のように言う。

作品の解説に入る前に、私は現実の島尾中尉が、基地においてどのように存在していたかを空想してみたいような誘惑を感じる。南方洋上の孤島の奥深い入江に基地を設営して、一回きりの出撃を待機する水上特攻部隊の若い中隊長というふつうに言えば悲壮なイメージと、「島の果て」のユー

モラスな表現によれば「ショハーテの軍人は百八十一人で、その頭目の若い中尉は、まるでひるあんどんみたいな人」でしたという表現との対照に心をひかれられないではいられないからである。そしてまた、そこに描かれた島尾中尉の表情の自画像と、かつて何度か会ったことのある現実の島尾の表情とを重ねあわせてみて、そこにある種の感慨を覚えないではいられないからである。要するに私は、島尾中尉は実際にも「ひるあんどん」のような表情で基地に存在していたものと信じている。⁷⁾

とはいえ島尾中尉の実像は、島民にとって敬愛すべき軍人であった。

島尾隊長は部下たちの生活をきちんと管理し、島人に対して言葉遣いが丁寧であり、島人への配慮を怠らなかつた。島尾は墜落した敵機の操縦士の遺骸を丁寧に埋葬したことから、島人に敬愛され、「神様」のような存在になった。のちに妻となった島尾ミホの『海辺の生と死』には、島尾が「我々の慈父」という意味の「ワーキャジュウ」と讃えられたことを記している。また、「島尾隊長」の「人情深く豪傑で」「あなたのためならよこんでみんなの命を捧げます」という歌が作られたという。⁸⁾

島民や部下にしてみれば、島尾の「自己矮小化」意識は想像できないものであっただろうが、謙虚で鷹揚な隊長像は内面の違和感・恐怖・嫌悪に支えられて現出していたわけである。

2. 「戦争もの」における区分

さて、そうだとすると島尾が自身の戦争体験をそのようにとらえた意識は終始変わらぬものだったのだろうか。

島尾の「戦争もの」は以下の順に発表された。
 1946年：『島の果て』（1948年『VIKING 4号』）
 1948年：『徳之島航海記』（10月『芸術』）
 1949年：『出孤島記』（11月『文芸』）
 1953年：『離島のあたり』（11月『新日本文学』）
 1962年：『出発は遂に訪れず』（9月『群像』）
 1967年：『その夏の今は』（8月『群像』）

1985年：『魚雷艇学生』、新潮社

1987年：『震洋発進』、潮出版社

『離島のあたり』から『出発は遂に訪れず』までには9年の隔りがあり、この間、1954年9月から翌年6月にかけて妻ミホの健康状態が悪化し、入院。「病妻もの」と呼ばれる連作の一つ、『われ深きふちより』を発表して、奄美大島へ移住している。1960年以降、ミホとの関係を見つめた連作が次々に発表され、『死の棘』（1961年、1963年、1977年）として3度にわたって刊行された。

上に拠れば、島尾の「戦争もの」は妻ミホの病気を挟んで創作時期が分断されているように見える。また、さらに「病妻もの」連作を隔てて書かれた作品がある。そこで仮に前期・中期・後期と呼ぶとして、各グループの差異の如何について考えてみたい。

小林崇利は「戦争もの」の質的差異について次のように指摘した。

……私の言いたいのは「島の果て」から「離島のあたり」（昭和28年執筆）までの作品群はまだほんとうの意味での戦争体験の作品化ではなく、むしろ戦争を悪夢として欠落させるところに成り立っており、戦後体験そのものが直接には反映されているとさえ言えるのである。（下線＝筆者）⁹⁾

小林の言う「戦後体験」とは、特攻体験を作品に書き始めた1946年から「病妻もの」を執筆し始めた1955年までの約10年間を指す。妻の病気（1954—55）によって、この10年間、戦争と共に妻をも記憶の彼方に封印していたことに気づき、そこで『出発は遂に訪れず』、『その夏の今は』という「未遂の特攻体験の背後にひそむ類廃にまで目くばりしたすぐれた作品」¹⁰⁾が成ったとする。先の分類による前期と中期の差異を明言している点は心強い。

本稿は小林説の検討はさて置き、論者がかつて『島の果て』『徳之島航海記』『離島のあたり』などに見出した主人公の心性について、『出発は遂に訪れず』『その夏の今は』及び『魚雷艇学生』『震洋発進』を読むことによって吟味し、筆者なりに各グループ間の質的差異に言及しようとするものである。

3. 『出発は遂に訪れず』について

1962年に発表されたこの作品は、特攻基地指揮官である主人公の、終戦直前の内面のゆらぎを描いている。

八月十三日の夕方防備隊の司令官から特攻戦発動の信令を受けとり、遂に最期の日が来たことを知らされて、ここにもからだにも死装束をまとったが、発進の合図がいつこうにかからぬまま足ぶみをしていたから、近づいてきた死は、はたとその歩みを止めた。¹¹⁾

この状況の中で、主人公は「はぐらかされた不満と不眠のあとの倦怠」とらわれたと感じる。そして、艇の整備など出動準備に勤む隊員に対して自分だけが身に迫る死を感じ過ぎているのではないかとも思う。緊張と弛緩によって精神は高ぶって行く。

太陽が容赦なくのぼり出すと、もう引きもどすことはできず、遂行できずに夜を明かした悔いの思いが、からだにみなぎり、強暴な気持ちに傾いてとどめられない。でも爆発させることがためられ、内側におさえこむと、無性に眠くなった。¹²⁾

死を恐れると同時に、むしろ死を望む気持ちも押さえがたい。

死の中にぶつかって行けば過去のすべてから解放されるのに、日常にとどまっている限りは過去から縁を切ることはできない。手ひどい肉体のいためつけが私はほしい。闇と光線と、轟音や鉄、そして肉と血が交錯してこしらえあげた偉大な未知の領域に、ふみこみつつあるこの上ない陶酔のただ中で、死はこの世で受けていたすべてののはたらきを終わらせてくれるだろう。¹³⁾

しかしながら、軍・組織の中の異分子として、そこでの違和を自己矮小化によって押し出そうとするような表現はない。むしろ、組織に適応することで仮にはあれ違和を乗り越えようと努める態度が強調される。

戦争と軍隊に適応することに努めその中で一つの役割を占めたことによって出来かけていた筋道を、生きのこることによって否定したことになれば、それでそれ以前のも

との場所に帰ったことになるとでもいうのか。しかしその考えは私を少しもなぐさめない。生きのびるためにそのとき適宜にえらぶ考えは、環境の大きな曲がり目のたびごとにまたえらび直さなければならなくなり、とどまるどころなくくり返されるにちがいない。¹⁴⁾

死の運命と引き替えに環境を受け入れつつあった主人公の心は、敗戦によって生じた生きのびる可能性のために虚無感におおわれてしまう。無条件降伏が通達された直後、特攻長官が敢行した特攻を前任将校が「武人の手本」と讃えたのに引きつけられて、効果のない最期の突入が「栄光につつまれて」見えもする。しかし、それは死を免れたことに安堵する内奥の矛盾をあからさまにする、つまり「危機をすりぬけたみじめさをいっそうかきたてる」ので、黙するしかない。¹⁵⁾

その夜、酒気を帯びて部屋を訪れた前任下士官は、身の上話に重ねて、「今度の戦争の責任は、士官がとらなければなりませんよ。(中略＝筆者) 士官は全部処分されるかも分りません。そうでなければこれほどの大きな戦争のあとのおさまりのつくはずがありません」¹⁶⁾と語った。主人公はこれに「妙な真实性」を感じる。

残された私は気持ちがふさいだ。唐突に「毒を仰ぐ」という熟語が浮かんだりした。それは私にできそうなばかりでなく、自分にふさわしい語感があった。(中略＝筆者) もし刀を抜かなければならぬときは抜こうと心に言いかけた。(中略＝筆者) 日本刀を抱くようにしてその鞘をさわっていると殺伐な気持ちが湧いてきた。この気持ちを以前に欲しかったと思った。だがいずれにしる明日になったら何よりもまず特攻艇の兵器から信管を外させよう、と思いつながら私は眠りに就いた。¹⁷⁾

これで物語は終結する。島の娘トエを「血が狂ったように求めていた」気持ちはおさまり、責任を引き受けて死に就くことを厭わない覚悟と、隊長として残務処理を完遂しようとする姿勢が示されて、話は閉じている。ここには、先行作品に見られた組織への違和に個として対峙する姿とは異なり、組織の側に立ってその意思

を体現する者の心性が見られる。つまり、士官＝強者の責任を分け持つ感じがある。

4. 『その夏の今は』について

戦争終結直後の数日を描いたこの作品は、1967年発表。弛緩に陥る隊内の雰囲気立ち向かい、一方で動揺する主人公の姿が見出される。……ひとりだちできぬほど酔いしれた彼が、引き抜いた日本刀をふりまわし、泣き声ともつかぬ声をふりしぼって叫んでいた。「ちきしょう。日本は負けたのだぞ。テイコクカイグンももう消えてしまった。それなのにこのままじっとしておれというのか。なぜ出撃しようとしなないんだ。意気地のないやつらばかりだぞ。だからこんなことになったんだ。ちきしょう。おれがぶった切ってやるぞ」そばに同じ艇隊の若い下士官がひとり遠巻きにしていたが、私は、「O兵曹、芝居じみたまねはよせ」と冷たい低い声で言ったのだ。¹⁸⁾

主人公は、Oを軽挙妄動するなど戒めつつ、死ぬならひとりで死ぬと突き放す。……震洋艇がほしければ、一隻だけやってもいいぞ。信管を装備させるから、いつでも好きなときに死に出かける。もしまた腹をかっさばいて死ぬ気があるなら、ここでおれがおまえの最期を見とどけ骨をひろってやろう……¹⁹⁾

自分で「なにかに乗り移られたか気がかり」なほど言葉を繰り返し、刀を捨てて泣き出すOを見て、「にくしみのかたまりとなって意気込んでいた」気持ちが無性に和らぎ、「自分の律儀な性格が長いあいだ隊員たちを余裕なくしぼっていたにちがいない時間が逆流した」と感じる。

彼は心の一面に「戦争が終わって勇みはやる自分」²⁰⁾をもてあまして、「隊内のゆるみ」に気持ちをたかぶらせて巡検を行う。しかし、隊員の表情や態度に違和と不服を見て取り、「投げやりな惰性」²¹⁾に陥っていく。

……ふたりの不都合に釘を刺す適切なことばも出てこず、「巡検中にギターをひくなどもつてのほか。いくさに負けたからと

いって気をゆるめてはいかん」と言い捨てるようなことばしか言えない。予備学生さんのときの、説教のへたな教官の気抜けしたすがたがよみがえり、避けようとするとかえってそうなっていく。²²⁾

自分に服さない相手と感じている前任将校の率いる第二艇隊への巡検は、「適地にふみこむへんな気分」が伴う。トイレ掃除が不十分であるのを見とがめ、指で汚れをなぞる。

「それでも掃除をしたとは言えないぞ」その指をつきだし当番の目の前に示しても、彼にその意味はわからず、うす気味悪そうなみにくい目つきをしたので、「その帽子のかぶりぎまはなんだい。気をゆるめちゃいけない」と言い、手の甲でひたいを強く突きやると、よろけて便所の板戸にぶつかり、あわてて立ち直りながら恐怖におびえた目なざしをするから、私は自分が粗暴なごろつきに見えてきた。²³⁾

しかしまた、この主人公の人格について、隊外の人間からの評価が語られもする。彼を招待した役場の助役と言う。

どことなくまえになかったなれなれしさが彼の挙措からにじみ出、「あなたは若いのに、ほんたによくおやんなさった。すこしも威張ったところがないのは、おひとがらでしような」と言っていた。²⁴⁾

主人公は、「……彼のことばをそのまま受けとる気にはなれない」と思いますが、酒肴を運んできた女子職員も交えて酒を過ごす。

……酔いの中で戦争は終わった、と自分に言いやす気持になっていた。やがて考えがゆるみ、わけもなく助役と手をとり合ったようだ。²⁵⁾

しかし、その帰り道で酒宴を振り返って自己嫌悪に陥る。

ふいに「戦争で勝ったり負けたりは歴史のならい。負けてこの世のなくなるわけがないから、まずは当面日常の生活の崩れをたてなおすこと」などと言っていた口つきを思い出し、吐きそうな気持だ。特攻出撃だけからだをかけ生まじめに従った生活が、まやかしのようだ。²⁶⁾

自分たちが戦争にまじめに取り組んできた

いうことは、裏を返せばその分村人の生活を崩してきたということでもある。敗戦が決まった今となっては、村の犠牲を戦争遂行の名で正当化することはできない。助役の好意につけ込むように助言めいたことをした自分に嫌悪を感じないではいられなかった。

また、この作品では島の娘トエとの関係が周知のものとして扱われている。主人公は、F少尉から「Tさんが先生（トエのこと＝筆者）のうちを襲撃した」との注進を受け、状況を聞くうちに「指先がふるえてきて」T兵曹長を呼び出す。問い糺されたTが疑いを否定すると、Fに詰め寄る。FがR兵曹長から聞いたと弁明すると、Rを呼んで確かめる。Rが否定すると「はなしが違うじゃないか」とFを咎める。

島からの引き上げについての具体的な指示を受け、今後の見通しが立つと、「雀躍りしたいはずみ」が起り、「一日も早く帰還の日どりが決まればいい」と思う。そして、帰る前にトエの父に考えを話そうと思うのである。

この作品で島尾は、部下に対する隊長としてのためらいや気負い、部落に人たちへの配慮・振る舞いを包むことなく客観的に描いている。そこに矮小化した自己から周囲を違和の目で見返すような視線は感じられない。

5. 「妻の病」と『死の棘』を経て

上述した中期「戦争もの」には、初期のそれに顕著であった自己矮小化が見られない。これはなぜか。

病妻に関わる作品の嚆矢は、1955年『われ深きふちより』であり、この年、妻が退院すると、島尾家は療養のため奄美大島へ移った。以後、多い年には数編、『死の棘』完結の1976年までに計23編の「病妻もの」を書いている。『出発は遂に訪れず』（1962）、『その夏の今は』（1967）はこの間に、「病妻もの」と並行して書かれている。「病妻もの」の執筆時期は、島尾の過ちに端を発する妻の精神的な不調・入院の後、「敏雄は事の如何を問わずミホの命令に一生涯服従す」という「至上命令」²⁷⁾を下されて療養のため奄美で暮らす時期であり、この間、島尾は妻との

関係を深く省察したであろう。

それはまた、自分という人間全体を相対化することでもあったはずだ。この期間には、自分にとっての「戦争」を冷静に見つめ直す機会となったにちがいない。島尾自身の過ちが惹起した妻の病は、役割としての妻ではない個としての妻を浮かび上がらせた。その個と向き合うことで、島尾は人を傷つけもする無自覚な強者としての自己を見出し、またその裏返しとしての弱さにも意識を向ける。先に見た中期2作の、自己矮小化から脱した落ち着き、客観性はこうした背景に由来すると考えられる。

『死の棘』完成まで、妻と向き合い、自身を見つめた壮年期の20年は、戦争への視線に相應の影響を与えたはずである。すると、この後に成った作品は中期とはいくらか趣を異にするであろう。

橋川文三は、島尾に「戦争に対する極度に純潔な態度」があるとと言う。²⁸⁾説明はないが、おそらく、島尾は戦争の不条理は措いて、軍人である以上敵軍とまみえて死を顧みず戦うことを潔しと考えていて、自分にそのような実戦経験がないことに負い目を感じていたということだろう。つまり、島尾は自分を厳密な意味での戦争体験者とは言えないと考えていたのではないか。以下の述懐はそれを裏付ける。

自分が将校の体験しかなかったわけだね、戦争のときの体験に取材して小説を書く場合に、非常に忸怩たるものがあるね。はたして小説になり得るかどうかというね。だけれどそれと同時に、今度はまた、将校ではなくて下士官であった人たちが、まったくそれに寄りかかって、それはもう片言隻句というか、咳ひとつしても小説になるんだな、なるように思うんだ、ぼくは。それをまた、そのまま気安く書いてると反撥もあるんだけどね。²⁹⁾

志村有弘はこの部分を紹介し、続けて島尾が『島の果て』などで童話的手法を用いたのは、「戦後間もないころ、戦争という過酷な状況を書くには、現実はいくらにも生々し過ぎる」からだと言う。この適否は別にして、島尾の述懐は、戦争下にあつて戦闘に参加せず、将校であるゆえに軍隊生活の不条理をある程度免れてい

た彼の引け目を語っている。そしてまた、下士官や兵としての戦闘体験を背負う作家に対する意地も見て取れる。

この述懐は1972年のことである。自身の体験と創作についてこのように率直に語れたのは、妻の病を乗り越え、『死の棘』を書き終えたからではなかったか。

6. 『魚雷艇学生』について

この作品は、1979年から1985年にかけて『新潮』に発表された「誘導」「擦過傷」「踵の腫れ」「湾内の入江で」「奔湍の中の淀み」「変様」「基地へ」の7編から成る。島尾は、長崎高商を経て1943年秋、26歳で九州帝大を繰り上げ卒業すると同時に海軍予備学生に志願し、兵科に採用される。ただちに士官に任じられ、旅順海軍予備学生教育部、海軍水雷学校（横須賀）、川棚臨時魚雷艇訓練所（長崎）、再び海軍水雷学校、再び川棚臨時魚雷艇訓練所（針尾海兵団）での訓練を経て、1944年11月、加計呂麻島（奄美群島）の大島防備隊に第18震洋隊指揮官として着任した。7編には、この間の出来事や思いが綴られている。

島尾はもともと指揮官への執着はなく、軍隊組織へは嫌悪感を持っていたという。旅順の兵科予備学生教育部へ配属されたのは、組織からの束縛が弱そうな（と錯覚した）戦闘機乗りを志望して飛行科に応募したものの「第三乙種合格」（肺浸潤）であったためか叶わず、「運命とでも言うほかはないものに導かれて」だったと述懐する。³⁰⁾

1年余りの訓練期間中、彼は積極的に軍隊組織に適応し、有能な士官となって戦争遂行に寄与しようとしたのではなかった。

自分が何をしていたのかさえわかっていたはいなかった。目の前に生起する事柄がどんな意味をもっているかの見通しも無かった。長大なベルトコンベヤーに身柄を預けているが如く、どこに運ばれていくかを知ろうとしなかった気がする。³¹⁾

しかし、だからといって違和にこだわり、組織に対峙するというのではなく、むしろ身を委

ねようとする気持ちにさえなっている。

……巨大な海軍の組織の中に抱え取られている感触のために、日々の舵取りの不安は感じないですんだのだった。³²⁾

そして、訓練の日々は身体を軍隊に馴致させ、内面をも適合させていった。

私は号令をかける自分の声が量も張りも満更捨てたものでもないなと思いつつ、彼を見上げて総員の敬礼を送っていたのであった。³³⁾

……たよりなさもあったが、草創の一員だという誇りに似た気分が湧いていたことも確かだ。³⁴⁾

……これから先の次第にしぼられて行く自分の役割の方に、からだを合わせて行く気負いに任せる気持ちになっていたと言えるよ。³⁵⁾

……折にふれ聞かされた心得の言葉は、思わぬ心の支えとなって進退を規制し、それを口の中で唱えようと、すっきりと背筋が伸びて律動を完成させ得たのであった。³⁶⁾

また、組織における人間関係は彼の忌避するところであったが、孤立してはいない。

私は独りじめに自分は周囲に融け込められないなどと思ってきたことがおかしくなっていた。³⁷⁾

経験を積んだ下士官は彼の最も苦手とするものであり、彼らへの対応に苦慮する。

私の何げない一挙手が、思わぬ波紋を広げていることに妙な無気味さを感じ、この先の仕組みの中で過ごしていかなければならぬ鬱陶しさにふと嫌悪と気おくれを感じた。³⁸⁾

しかし、これも克服されていったのであった。

…軍隊階級の差によってではなく、別のやり方で彼の横着な態度も攻略できるのではないか、などと考えていたのだった。³⁹⁾

（下士官たちと料亭にいて他のグループに乱入された後＝筆者）もしかしたらこの共同防衛の乱闘で五人の兵曹長とのあいだに気持ちの上の或る近寄りを進めたかもしれなかった。⁴⁰⁾

島尾は結局、指揮官としての訓練をつつがなく終え、赴任途中に発生した赤痢の処置も適切に行い、敵潜水艦にも遭遇せず、加計呂麻島に

着任し、基地の設営に当たった。

『魚雷艇学生』は、違和や不安を抱えつつも組織に適応し、使命遂行を可能にするスキルを身につけ、下士官らとの関係を構築しつつ任務に就く、その間の行動と心理の起伏を客観的に語った作品であった。

7. 『震洋発進』について

この本は、1982年8月から1985年8月にかけて『別冊「潮」』に発表された「震洋の横穴」「震洋発進」「震洋隊幻想」「石垣島事件」補遺の4編から成り、1987年に出版された。この作品群において、島尾は終始粘り強い記録者の態度で震洋部隊の往時を丁寧に辿っている。そこには同僚への親しみが横溢し、海軍組織への違和は感じられない。

私は最後の藁しべにも頼る思いで横穴を探しあて、量産されて多方面に設置された震洋隊が、戦力として中心に置かれたおかしな末期の状況を、ふりかえって考えてみたい気持をおさえることができないようだ。⁴¹⁾

ここには、人生の晩年になって過去を懐かしむという心境というよりも、戦時の自分を冷静にふりかえろうとする意思が見られる。

……状況に流されての予備学生志願であったから、我ながら覚悟の程は不安定であった。しかし死は受容し、そちらに向かって自分を押し出していることはできた。結局敗戦となって生き延びたが、その接点のところがどうしても一つの飛躍と感じられて拭えず、長いあいだ戦時中の自分の環境を振り返るについての或るうしろめたさが除けず、震洋体験も伏せておきたかった。⁴²⁾

特攻基地という戦場から生還したことに由来する「うしろめたさ」は、年月を経て「なつかしき」に凌駕される。

いつから私は震洋隊の基地跡を訪ね歩きたいと思う気持が生じたろう。おそらくそれは自分がかつて所属した部隊跡を戦後始めて訪れた(1956年＝筆者)後先の頃からだと言えるかも知れない。敗戦の直後

は心中に微妙な揺れ動きがあつて、戦中の事象はすべて記憶から遠ざけておきたかつたが、同時に又奇妙ななつかしさも押さえきれず、こっそりとその場所を覗いてみたい気持も強かつた。まるで犯罪を犯した現場について引き寄せられでもするかのよう⁴³⁾。

彼は加計呂麻島に震洋を格納した横穴を見出し、「おーいシマオ中尉!」と叫びそうになる。私はそれまで戦中の軍隊体験を殊更に忘れてようと努め、かなりは成功し得たと思つていたのに、もろくも一挙に崩れてしまったのだが、同時にそれがまたへんな快さに伴なわれてもいることに気づいたのだった。⁴⁴⁾

忘れようとしてきた軍隊時代へ、「たいへんな快さ」を伴って立ち返ることができた背景は何か。為すことなく生還したうしろめたさを解消するほどに年月が経過したということかもしれない。しかし、それだけではないだろう。

彼が加計呂麻島を訪問したのは、奄美群島の日本復帰(1953年)後の1956年であった。この年は、妻の病(1954～55)の直後にあたる。戦争中の自分を省みる心境が生じたのは妻との関係を見直し、自己を精算するという時間を経たからではなかつたか。加計呂麻訪問は、日本復帰という必要条件があつたにせよ、そうした内面の深化に支えられていたはずだ。

島尾は生きて彼の地を訪ねることができる「えにし」を、そこで「或る忘我の気分に浸れることに気づきはじめてたのであつたらうか」と推測して言う。

……地の肌のぬくもりに融け入ってしまうかのような、或いは永劫の気配をほんのわずかながらからだ全体に振りかけられたような、何とも気だるい安らぎと充実の境域にわが身が置かれているなど感ずることができる……⁴⁵⁾

死を覚悟した戦場である加計呂麻島は、同時に妻との出会いの場でもあつた。この島に改めての親しみが生じた背景には、敗戦から相応の時間が流れたこと、奄美群島の日本復帰という環境の結節点があつたことと併せて、妻との新たな関係が始まつたことがあつた。

……私の心中では、五十四、五年のあたりから、国の内外に散らばった震洋隊の基地跡を（といっても殆ど震洋艇の格納壕の横穴跡を見ることにしかならないが）訪ね歩きたい気持がかなりしっかりと根をおろしはじめたのでもあろうか。⁴⁶⁾

8. 結語

中期2作には自己矮小化から脱した落ち着き、客観性が見られた。そして、後期2作には事実には逆行して、自身の心性を見とどけようとする意思が見られた。それらは、「妻の病」を受け止め、『死の棘』執筆までの時間を経ることで到達し得た姿勢であった。

戦争を背負った軍隊が在地へ残した理不尽な棘は容易なことで抜き取れるものとは思えない。⁴⁷⁾

この「棘」は妻への棘でもあったと、島尾は思ったであろう。してみると、初期の「戦争もの」における自己矮小化は、あるいはカタルシス効果を伴った自己肯定であったかもしれない。

引用文献

*引用部分においては、文意を損なうことはないかと判断し、改行は行わなかった。

- 1) 柴田：「島尾敏雄と戦争—自己矮小化の意味—」（愛知教育大学附属高等学校国語科編『島尾敏雄へのアプローチ』、愛知教育大学第7回高校教育シンポジウム資料、3-14（1986）、柴田：『国語・国文・国語教育論集』（1989）再録
- 2) 島尾敏雄：対談集『平和の中の主戦場』冬樹社、12（1979）
- 3) 同上、18、（対談相手は吉本隆明）
- 4) 前掲「島尾敏雄と戦争—自己矮小化の意味—」、13
- 5) 奥野健男：『島尾敏雄』、泰流社、74（1977）
- 6) 前掲「島尾敏雄と戦争—自己矮小化の意味—」、12
- 7) 橋川文三：「島尾作品への個人的解説」（『出発は遂に訪れず』、旺文社文庫）、308（1973）
- 8) 山田篤朗：「大平ミホとの出会い」（『検証 島尾敏雄の世界』、勉誠出版、110（2010）
- 9) 小林崇利：「仕事の意味—病妻体験—」（志村有弘編『島尾敏雄『死の棘』作品論集、クレス出版）、213

- (2002)（初出『主潮』1980）
- 10) 同上、214
- 11) 島尾敏雄：『出発は遂に訪れず』、旺文社文庫、160（1973）
- 12) 同上、162
- 13) 同上、174
- 14) 同上、197
- 15) 同上、198
- 16) 同上、201
- 17) 同上、202
- 18) 同上、207
- 19) 同上、208
- 20) 同上、220
- 21) 同上、224
- 22) 同上、222
- 23) 同上、224
- 24) 同上、228
- 25) 同上、230
- 26) 同上、230
- 27) 島尾日記に挟まれた血判状、2011. 10. 31『朝日新聞』
- 28) 橋川文三：「島尾作品への個人的解説」（『出発は遂に訪れず』、旺文社文庫）、315（1973）
- 29) 志村有弘『『出発は遂に訪れず』と戦記物』（『検証 島尾敏雄の世界』、勉誠出版）、214（2010）
『文藝』1972年4月、安岡章太郎との対談、『内に向かう旅 島尾敏雄対談集』泰流社、（1977）
- 30) 島尾敏雄：『魚雷艇学生』、新潮社11・12（1985）
- 31) 同上、72
- 32) 同上、79
- 33) 同上、32
- 34) 同上、58
- 35) 同上、59
- 36) 同上、62
- 37) 同上、46
- 38) 同上、160
- 39) 同上、124
- 40) 同上、173
- 41) 島尾敏雄：『震洋発進』、潮出版社、13、（1987）
- 42) 同上、45
- 43) 同上、89
- 44) 同上、92
- 45) 同上、97
- 46) 同上、99
- 47) 同上、100